ミツバチ科学 17(2)：77—80
Honeybee Science (1996)

スリランカのミツバチ

原　道徳

仏教美術に造詣の深い友人が責任者で行くからと，スリランカにさそわれたので，ミツバチに出会えるならばと同行することにした．

インド大陸が一粒の涙をこぼしたような小さな島，昔，セイロン，今，スリランカ（光輝く）の意味を持つ島で，その時，出会ったミツバチについて報告したい．

1　出発前の文献調査

事前にスリランカのミツバチ情報の入手を始める．まず，玉川大学の吉田助教授に問い合せをしたら，折返し返事をいただく．

「……『キャンディ』から『バンドラベーラ』と南の山岳地帯ではオオミツバチも沢山見られる．……スリランカ大学のプンチヘワ博士に連絡をとったら，日程次第では案内もできる」とのご返事だった．

しかし，大学訪問はスケジュールから見て，無理があったので割愛する．旅行の目的が仏教美術の勉強だから，近くにミツバチを飼育している場所を確認するため，図書館から8冊，関係図書を借出して調べたが，コース途上にそれらしき場所は見出せなかった．

でも，次の2冊は大変参考にさせていただいた．

① トーマス・D・スィーレイ著「ミツバチの生態学」(1989).

この中に“南アジアにいるミツバチ属，三種の比較表”があって，ミツバチの体重，造巣場所，コロニーの個体数等が表1の如く記されてあった．

② もう一冊は，蝶谷正明著，「スリランカ古代装飾トイレの謎」(1994).

著者の蝶谷氏は4年間，スリランカに滞在して，古代装飾を実施調査し，その成果を出版された人．現在，群馬県富岡市で学習塾を開設されておられるので，ミツバチに関係した場所を問い合わせたら，返事をいただいた．

「……ミツバチの事はわからぬが，コロンボ在住で，スリランカ青年海外協力隊の調整員をされている渡部佳彦氏がおられるから，ファックスで，ミツバチの場所を問い合わせてみては…」のアドバイスである．

表1　南アジアのミツバチ属3種の比較

	コミツバチ	トウヨウミツバチ	オオミツバチ
働き蜂の体重(mg)	32	54	155
造巣場所	低木の枝	洞	木の枝または崖
高さ	低い（<5m）	低い（<2m）	高い（<15m）
見えやすさ	目立たない	目立つ	目立つ
分散度	間隔が広い	間隔が広い	集塊しやすい
コロニー個体数	6,000匹	7,000匹	37,000匹
攻撃性	低い	低い	強い
移動性	局所的移動	移動しにくい	移動しやすい
外役活動面積	小さい(<3km2)	小さい(<10km2)	大きい(>300km2)
総重量	0.2kg	0.4kg	6.0kg

スィーレイ（1989）より

図1　シギリヤレディ（1400年前の壁画）

早速，コロンボの渡部氏にファックスで連絡をとったが，出発までに返事がとどかなかった．

別に，観光会社側からは，コロンボ連絡事務所の担当ガイド，T.R.カマラ氏に連絡を取ってもらったが，うまく連絡がとれぬままの出発となる．

2　シギリヤの壁画とハチミツ

シギリヤロックはスリランカ観光第一の目玉で，スリランカの中央部，キャンデイの北方・90kmの地点にある．

美女の壁画が残されている伝説の岩山．岩肌には，1400年前に500体の美女像が画かれていた壁画の場所だ．その中の18体だけが現在も，クッキリと輝いた色彩を残し，シギリヤレディの愛称で世界的に有名である．美女画はフレスコ画法によるもの．この画法は古来から壁画制作に広く行われた方法で，辞典をみてみると，フレスコ画法とは，壁画の一種，漆喰壁面の乾燥しないうちに，顔料の溶液で描いたものとある．

その方法は，下地になる漆喰が，なまかわきのうちに水性顔料をよく漆喰に浸み込ませる．そうすると，乾いてから剝落しない．それだから画家は，すばやく大画面を扱いきるだけの非常な熟練と周到な準備が必要だと．つまり，塗り立ての漆喰壁に水彩で描く壁画法の事である．

等身大の美女画は岩肌の壁面に，生き生きとした色彩を今に残していた．

そしてその壁画制作にハチミツが使用されていると言う事が興味をさそった．

この壁画手法について，ダイヤモンド社の「地球の歩き方」に次の説明がなされていたので要点のみを記す．

① まず，岩肌をモミガラや，カーボナイト（有機繊維）を混ぜたターマイトン土（粘土の一種）で塗りかためる．

② 次に石灰と砂を混ぜた粘土で中塗りをする．

③ 最後の仕上げに，前の層よりも厚めに「ハチミツ」の混った石灰で，なめらかに上塗りがなされる．

④ 最後に，その上に野菜，花，葉，木の汁などを材料にした赤，黄，緑の顔料で美女たちの姿に色彩を出す．

昔，描かれたフレスコ画法の色彩が現在も，あざやかだ．その原因の一つは，ハチミツの混った石灰がポイントかも知れないとも思えた．

現在，ハチミツ利用のほとんどが嗜好品としての食品利用であるけれど，食品以外にハチミツの利用できる開発が，1500年も前に実施されていた事を印象深く感じた．

さて，壁画場所の出入口には，3人の監視員が，一段高い場所に立ち，貼紙にも「カメラ撮映にはストロボ禁止」が日本語で書かれてある。それなのに，フラッシュの光が出るたびに監視員の大きな声が飛んでいた．

出入口は一か所だけなので混雑しており，旅の恥はかき捨てよろしく，シャッターの光が天井を走る．

監視員の近くで私は，ストロボなしだから安心と，シャッターを切ったら「パッ!!」と閃光におどろく．このカメラは息子のだったと気がついたがおそかった．

片手で監視員を拝むようにして外へ出る．その時の写真（図1）はうまく写っていたが，マナーの悪さに気の引けた思いが残っている．

もう一か所，フレスコ画近くにある壁，ミラーウォールと呼ばれる鏡の回廊は高さ3m．真珠のような輝きを持った鏡の役目をしていると案内書に記されてあったが，こちらはあまりそ

のようには見えなかった．

この回廊はどのようにして作られたのか．これにもハチミツが使用されていた．

レンガの芯に「漆喰」が塗られ，その上に多量の卵の白味とハチミツと石灰を混ぜたものが上塗りされる．そして，その表面を丹念に磨きあげると光り輝く壁となるのだとの説明だ．

思わぬ場所でハチミツを使ったものが観察できた．

3　岩壁に舞うオオミツバチ

美人壁画の部屋を出て，さらに階段を登ると中間広場に出る．宮殿跡はそこからもう一度，階段を登らねばならぬが，ここ中間広場の階段裏側，高さ10m程の岩肌に，黒い大きなカタマリの蜂の巣が，4個数えられた（図2）．これがオオミツバチの巣房．その周囲をやはり黒い蜂が飛んでいるのが肉眼でもわかる．でも，予備知識がないと見落す．この巣を見上げる観光客はいない．双眼鏡で見ると，黒い巣の周辺に黒色の蜂が飛んでいる様子がよくわかった．

狂暴性のあるオオミツバチだから，当局としては，これを観光客に知らせて，わざわざ恐怖心をあおるよりも，ソーットしておきたいのかも知れない．

前述した比較表にあるように，このオオミツバチはトウヨウミツバチの3倍の大きさがあり，高さ，10mもある岩壁に巣を作り，その巣には3万7千匹も集合しているのだ．しかも攻撃性が強いのだからこわい．観光の目玉の場所だけに，恐怖心をいだかせる情報はなるべく，さけていようとしている考えだろうか．

このオオミツバチが数年前，観光客をおそった騒動があり，その結果，この中間広場の一番離れた場所に，約4m四方を，天井も側面も入口も全部，金網で囲った避難場所が設置されていた．しかし，最近は被害がないのか，金網の中は，ガランとして説明板もなく，観光客には，売店の空家ぐらいにしか受取られていないようだった．入口の金網ドアも破れたままになっている．それだけ被害の恐しさが忘れられているのであろうか．

図2　オオミツバチの巣

私としては，スリランカ観光の目玉，シギリヤロックで壁画を見，オオミツバチの巣も確認できて満足した．

この広場からもう一段高いシギリヤロックの頂上に登ると，宮廷跡の広場があり，ぐるっと360度の眺望は，緑の草原がひろがるすばらしい景色であった．

4　バンダーラウエラの養蜂場

吉田助教授からの手紙にもあったバンダーラウエラには，ガイドからもミツバチがいると聞く．しかし，予定のコースから4kmも離れた場所だったが，相談の結果，行ってもらう事になる．

私の持時間は20分間で，その間，他の会員達の近くに住む大学教授の家庭内見学の手筈が決まる．バンダーラウエラがどのような場所なのか，ダイヤモンド社の解説には次のようにある．

「スリランカ丘陵地帯の数ある町の中でも，バンダーラウエラは最も気候のよいところだといわれている．熱帯のスリランカに住む人々にとって，住みやすい町だろうとの憧れがあるが，この地に見どころらしいところはない．観光客にとっては魅力あるとはいいがたいが，ここは『良きオアシスだ』」と記されたに過ぎない．予定のバス路線からも離れているし，あまり期待できそうもない感じだった．

しかし，翌日，バスを降されて驚いた．イメージとまったく違っている．その場所は入口に鉄の扉があり，カナダ政府援助による国営の養蜂場であった．森の中へ通じる道路を歩いても建物は見えてこない．

途中，養蜂器具一式の実物を展示した掲示板

図3　国営バンダーラウエラ養蜂場の掲示板

図4　トウヨウミツバチの巣枠

が見えた（図3）．道路近くに見える一本足の郵便ポストに似た巣箱は，森に囲まれたオトギ話の世界を感じさせてくれた．

モダンな建物には若い所長が大きなテーブルを前に待っておられ，壁には世界の養蜂関係図表等が貼布してあった．ゆっくりする時間はない．すぐに私一人だけで，広い場内を見て廻る．でも，広い敷地内に人影がない．三棟並ぶ建物をつぎつぎにのぞく．

一棟目は管理棟らしく，検査室には遠心分離機，フラスコ，ビーカーが整頓されている．次の棟には各窓に金網がめぐらされ，室内には巣箱の部品や完成品が積み上げられているから，巣箱製造工場．そのとなりの棟はすべての窓にカーテンが張られて室内は見えず，鍵がかけてあった．早く巣箱のミツバチを見ないと時間がない．

道から見えたポスト風の巣箱へ歩きはじめたら，現地人の青年が，面布とくん煙器（日本製の半分の大きさ）と，枯れたシュロの葉を握って現われた．所長の指示があったのであろう．一本足の巣箱前に案内される．

面布を差出すので「ノウ!!」と手を振る．トウヨウミツバチはおとなしいことがわかっている．巣箱から蜂の出入りはない．しかし蓋をあけると巣枠一ぱいの蜂だが，蜜は貯めていない．

ニホンミツバチの半分の大きさで，巣枠もひと回り小さく（図4），取り出した巣箱を青年が指差した所に女王蜂がいた．動きもノンビリしている．

小型巣箱には，6枚の巣枠に蜂は巣が見えぬくらいに，ビッシリだが，巣は軽くて蜜は入っていない．常夏の島だから貯蜜の必要がないのだろうか．

20分間，1人だけの構内見学に心残りはあったが，実物に出会った満足感をかみしめながら門前に待つバスに乗込んだ．

家庭見学に行ってもらった人達からは，良いフンイキだったと聞かされて安心した．

養蜂場を後に，高原を走るバスの両側斜面には，山肌が見えぬくらいに手入れされた紅茶畑が続く．しばらくすると前の席が騒々しくなり，バスが徐行をはじめた．「ハチ，ハチ，ハチのかたまりですョー!!」とおしえてくれる．

バスの前方，大木の枝に3ヶ所，黒く固まったオオミツバチの巣が見えた．

この地方は，オオミツバチ，コミツバチが共存している現状も確認できた．

（〒803　北九州市小倉北区金鶏町1-34）

主な参考文献

スィーレイ，T.D. 1985（大谷剛訳，1989）．ミツバチの生態学．文一総合出版．東京．pp. 256.

杉本良男．1987．もっと知りたいスリランカ．弘文堂．東京．pp. 305.

蝶谷正明．1994．スリランカ古代装飾トイレの謎．TOTO出版．東京．pp. 246.

地球の歩き方編集室．1994．地球の歩き方スリランカ．ダイヤモンド社．東京．pp. 370.

HARA, MICHINORI. Honeybees in Sri Lanka. *Honeybee Science* (1996) 17(2): 77–80. Kinkei-cho, Kokura-ku, Kitakyushu-shi, Fukuoka, 803 Japan.